



赤江小学校だより

ちまちだ

白鳥小との児童交流特集号

校長 難波真章

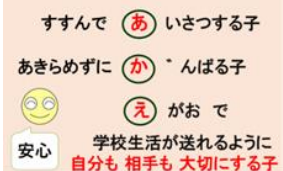
令和6年1月16日

ひとみ輝き 笑顔と笑い声がこだまする赤江小学校

すすんで
あいさつする子
になろう

あきらめずに
がんばる子
になろう

自分もあいても
大切にする子
になろう



平素より、赤江地区の皆様には、本校教育に対してご理解とご協力を賜り、心よりお礼申し上げます。

本校では、令和4年から開校150年を記念する事業に取り組んでいます。昨年10月28日に開催しました花火大会では、大変多くの方にお力添えをいただきました。あらためて皆様に支えられている学校であるという思いを強く持ちました。子どもたちは、夜空に広がる350発の花火を見て赤江小学校に対する思いを深めてくれたことと思います。

本号では、コロナ禍でしばらく中断していた白鳥小学校との児童交流についてお知らせいたします。

児童交流 50周年

昭和48年に始まった大阪の羽曳野市立白鳥小学校との交流が令和4年に50年目を迎えました。県内で学校同士が50年にわたる交流を続けているという話は聞いたことがなく、非常に貴重な取組であると思います。両校の交流は、昭和48年に白鳥小の児童が赤江を訪れて実現しました。以来、交流は少しずつ形を変えながら今に至り、その間、両校は姉妹校縁組をしてより強い絆で結ばれました。多くの方から心温まる交流の思い出をお聞きします。この交流が、子どもたちや保護者の皆様にとって深く心に刻まれる貴重な体験となっていることがうかがえます。ここに至るまでの赤江小、白鳥小、双方の関係の皆様のご尽力に心から敬意を表したいと思います。令和4年には、記念事業として式典が開催され、記念誌が発刊されました。田中崇如 委員長を中心とする実行委員会の皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。

家庭や地域社会の変化、個々の教育ニーズの多様化、ICT活用教育の促進、さらにコロナ禍と、両校を取り巻く教育環境は大きく変化しています。目まぐるしく情勢が変化する激動の時代ですが、こんな時代だからこそ児童交流の意義と大切さがあると思います。これからも両校の絆を大切に、交流の灯をともし続けていきたいと思っています。(児童交流の始まりについては、後段のコラムをご覧ください)

～ 児童交流がWEBを活用して再開しました ～

令和5年12月にコロナ禍で中断していた児童交流が再開しました。白鳥小からの要望を受けて令和2年度より交流の在り方を検討してきましたが、ここ数年で両校ともにICT環境の整備が飛躍的に進んだことから、タブレットパソコンやインターネットを活用したWEB交流を行うこととしました。

12月5日(火)には赤江小の6年生と白鳥小の6年生がタブレットパソコンでビデオ会議ソフトを使

って交流しました。両校ともに 12 グループに分かれ、お互いにまず自分たちの学校や地域の様子を紹介し合い、その後、自己紹介し合ったり、趣味やハマっていることなどを話し合ったりしました。交流はとても盛り上がり、「白鳥小の友だちとたくさん話が出来ました」「話ができ楽しかったです」「白鳥小の友だちは優しかったです」「本場の関西弁が聞けました！」などと好評でした。安来市と羽曳野市、離れてはいますが WEB を活用して楽しく交流できることがわかりました。これからも内容を工夫しながら交流を深めていきたいと思います。



双方を行ったり来たりしての交流の再開は、宿泊地が確保できないなどの事情で難しそうですが、新たな直接出会っての交流方法を模索しながら、まずは WEB 交流の充実を図っていききたいと思います。



～ 令和 2 年度からの様子について ～

コロナ禍になり令和元年秋に白鳥小学校に訪問したのを最後に交流は中断しました。その後の様子について簡単に振り返ってみます。

大山青年の家宿泊学習（5 年生）

5 年生は、毎年秋に 1 泊 2 日で白鳥小を訪れていましたが、令和 2 年度からは大山青年の家にて 1 泊 2 日の宿泊研修を行っています。大山青年の家では、「ちょっとこわいカヌー体験」「お楽しみのキャンプファイヤー」「石窯を使ってのカレーライスづくり」など、たくさんの活動を行っています。



思うように漕げず助けを呼ぶこともあります。次第に遠くに漕げるようになり、そのころには硬かった表情も柔らかくなっていきます。



お楽しみのキャンプファイヤー。準備してきたスタンプを発表しあい和気あいあいとした楽しい交流をしています。見上げると満天の星空です。

楽しみいっぱい、不安もいっぱいですスタートする宿泊学習ですが、2日間しっかりと活動し、終わるころには頼もしい姿がたくさん見られます。「自主性」や「主体性」「助け合う心」が育まれる子どもたちにとって大切な学習となっています。

児童交流 50 周年記念式典

令和 4 年 6 月 17 日、赤江地区教育後援会長 遠藤 孝 様を来賓に迎え、記念式典が開催されました。式典には、PTA 役員の皆様、6 年生、教職員が参加し、白鳥小学校からは 黒木 悟 校長先生がリモートで参加されました。20 年、30 年、40 年と節目節目に開催してきた記念事業。これまでは安来市長をはじめ多くの来賓を招いて盛大に開催されていましたが、コロナ禍のため縮小しての開催となりました。

式典は、遠藤教育後援会長、二岡佳嗣 P T A 会長、田中崇如実行委員長、両校の校長のあいさつのほか、実行委員会が編集した「これまでの児童交流を振り返る画像」や学習発表会で披露した「銭太鼓」の様子をスクリーンで視聴しました。

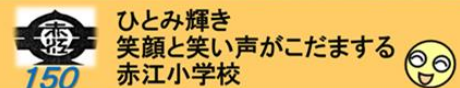


児童交流旗の掲揚で式が始まりました。6 年生が児童代表として参加しました。



白鳥小の黒木校長先生はリモートで参加されました。遠藤教育後援会長の挨拶の様子です。

記念コラム～児童交流のはじまり～

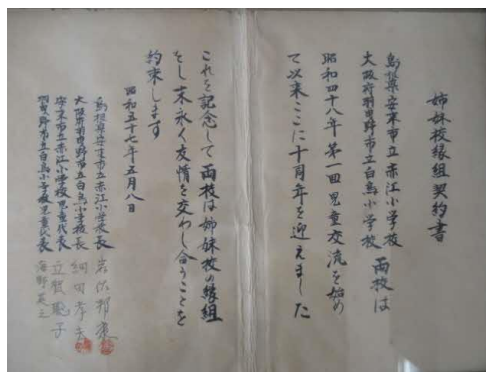


昭和 47 年赤江小 P T A 役員会の席で「PTA の役割は環境整備だけでは駄目である。子どもたちの教育に直接かかわろうではないか。赤江の子は井の中の蛙であってはならない。広くいろいろなものと交流していく時代ではなかろうか。」との提案があり、「都会の子どもと農村の子どもが交流すれば

よりいろいろなことが勉強できる。学校教育では学ぶことができない体験ができるのではないか。」と
いった話にまとめられました。

早速、当時の小笹 PTA 会長、大江副会長、足立校長が、市 P 連研修会の講演講師で赤屋に滞在して
おられた元大阪教育大学教授の村田先生のもとを訪問し、都会の小学校との交流の仲介をお願いされ
ました。この提案は、村田先生の大学でのゼミに参加していた白鳥小の先生を通して、白鳥小の佐藤校
長に届くこととなります。白鳥小では、「臨海学校か林間学校を行いたくましさや、協調性、忍耐力、
実践力といったバイタリティある子どもを育てたい」と考えており、この提案に共感できるところが
あったため、教職員、PTA 役員会で検討を重ね、交流相手として手を挙げられたそうです。

当時の赤江小の安達校長先生は「自分としては、責任問題、衛生面、教育委員会の規則、予算等受け
入れに関して不安があり時期尚早と思っていたが、PTA 役員のアマリの熱意に心打たれ、やってみよ
うと決心した。」とあります。そして、昭和 48 年の夏、白鳥小の 6 年生たちが赤江の地を訪れ、以降
50 年にわたる児童交流が始まりました。当時の教育にかける熱い思いが伝わってくるエピソードです。



昭和 57 年には、赤江小と白鳥小の間で姉妹校縁組の契約が交わされました。

両校の上空からの写真をいただきました

令和 4 年度末に、児童交流 50 年記念実行委員の皆様よ
り、「赤江小学校と白鳥小学校を上空から撮った写真」をい
ただきました。2 枚とも縦 120 センチ、横 18 センチの大き
な写真です。また、児童に見立てた 2 センチ程度の赤と白
の人形も児童数分持って来ていただきました。赤は赤江小
の児童、白は白鳥小の児童をイメージしているそうです。
児童交流ができなかったので、せめて写真の上で白鳥小の
友だちを思い浮かべて並べてほしいとのことでした。早速 6 年生で写真の上の人形を並べてみました。



両校の管理職同士で意見交換をしました

令和 5 年 1 月には、校長、教頭の 2 人で白鳥小へ行ってきました。白鳥小の
校長先生、教頭先生のお世話で校区にある世界遺産の古墳群や市の史料保存施
設、学校近くの町並みを見て回りました。もちろん白鳥小にもお邪魔し、校舎や体育館など実際の交流の
場を見せていただいたり、これまでの交流の歴史や今後の交流のあり方について話をしたりしました。
校舎のあちこちに児童交流の足跡がありました。児童交流の意義を再認識するよい機会となりました。

